

夫婦で冒険者！

奥さんは魔女。
旦那さんは寝取られマソ。

第二章 擦り切れたワンピースの尻

八ヶ岳昌司



主な登場人物

ミユリ・クラウチ

炎を使った攻撃魔法を得意とする黒魔法の使い手。数々の強大な魔物に勝利し、最強の女魔術師と呼ばれる。大きなお尻をピチピチの革のズボンに包み、男を魅了する危ない人妻。

タチバナ・クラウチ

ミユリの夫であり幼馴染。白魔法の使い手であり、防御魔法と回復魔法のエキスパート。癒し系のタチバナと呼ばれ、皆に慕われている。

ヨリカ・オクヤマ

ミユリの従姉妹。冒険者に憧れてムーンヴィルの町へやってきた。

クジマ・ゾリユウジ

ミユリの学生時代の魔法の師匠。今は隠居の身。偏屈な性格の老人。

第二章 擦り切れたワンピースの尻

夫婦で冒険者をやっているミユリとタチバナが、冒険者に憧れて故郷の町から二人を頼ってやって来た従姉妹のヨリカと共にミツシヨンに出かけ、エヴィル・サラマンダーを倒して『豊穣の指輪』を持ち帰った、その翌月のこと。

その日、ミユリは、冒険者ギルドに、ワンピースの上に薄手のカーディガンという珍しい格好で訪れていた。普段は黒いレザーのハードな衣装で冒険に出かけるミユリであるが、今日は冒険をするために訪れたわけではない。

彼女がギルドを訪れた理由は、報酬の受け取りの手続きをするためである。トップクラスの冒険者であるクラウチ夫妻（ミユリ・クラウチとタチバナ・クラウチ）は、受け取る報酬金額も他の冒険者達とは桁が違う。

特に先月は、『豊穣の指輪』を持ち帰るという大きな成果を挙げたため、国王から直々に贈られる勲章の他にも、国から多額の報奨金が支払われる。一般の冒険者であれば、ギルドの受付で手渡しすることがほとんどであるが、このくらい金額が大きくなると小切手による手続き

を踏まなければならない。

また、その際の冒険に同行していた従姉妹のヨリカにも報酬が支払われるため、彼女の口座にも報酬を振り込むための手続きをする必要があった。

あのミツシヨンの後、ヨリカは冒険者ギルドへの本登録をせず、一旦故郷であるサトの町へ戻る決断をしていた。

ベテランの冒険者である従姉妹のミユリと、その夫であるタチバナと共に初めての冒険に出かけ、ただのゴブリン退治だったはずが、エヴィル・サラマンダーという最強クラスのモンスターと遭遇し、たとえヨリカはタチバナの陰に隠れていただけであつたにせよ、パーティーとしてはこれを撃破。ヨリカにとっては初のミツシヨンにして、それは信じられないような大きな成果のはずだった。

だが、そこからの帰り道、パーティーは五人組の盗賊と遭遇し、ヨリカはクラウド夫妻の秘密を見てしまった。モンスター相手には最強を誇るミユリが、実は人間の男の前では魔法が使えず無力であり、それ故に非力な魔法使いであるクラウド夫妻は悪党にまったく歯が立たず、冒険の中で度々、妻のミユリの身体を盗賊達に弄ばれてしまっているという事実。

そればかりか、夫のタチバナは、妻のミユリが犯されている間、白魔法使いの衣装である口

ーブの下で密かに右手で自分のモノをしごいてオナニーを繰り返しており、あろうことか妻のみならず、妻を犯している男にまで回復魔法をかけ、男女双方の性感を高めていた。

そのあまりの気持ちよさと、あまりに艶やかな女っぷりによって、ミユリは『魔女のオマ○コ』として、盗賊達の間で評判になってしまっていたのだった。

そんなミユリの姿を見たヨリカはショックを受け、冒険というものが、自分が考えていたよりもずっと過酷である事を悟り、ミツシヨンから帰った後、冒険者ギルドへの本登録をせず、一旦身を引くことを決意した。

ミユリが諭したように、ヨリカは自分に冒険者として生きていくためのスキルがまだまだ足りないことを認め、まずは修行をしてそのスキルを手に入れてから、再び冒険の地に戻ってやることを夫婦に約束したのである。

「いつか、ミユリ姉さんを守れるようになって戻ってきます。その時まで、待っていて下さい！」

ヨリカはそう言ってミユリに抱き付き、ぎゅっと抱擁すると、そのまま走り出し、故郷であるサトの町へと戻って行った。

その後ろ姿を、ミユリは不安と期待の入り交じった、ほろ苦い気持ちで見送った。

（ヨリちゃんには悪いことをしてしまったかもしれない。それにあの子は秘密を守ってくれるかしら……）

ミユリとタチバナにとつても、自分たち夫婦の恥ずかしい秘密を他人に見られるのは今回が初めてである。そして自分たちは盗賊たちからヨリカを守ることも出来ず、ヨリカは五人の盗賊の中でも一番下っ端であつたあの猿顔の男によつて、自らも処女を失つてしまった。

それにも拘わらず、ヨリカは前向きで、シヨツクを受けながらも、自分に足りないものを埋めるために走り出したのだ。

ミユリは本心ではヨリカに冒険者になつてもらいたくないと思つており、だからこそ冒険の現実をありのままに見せて、憧れだけではやっていけないことを知ってもらおうと思つていた。図らずしてヨリカには、自分の一番かつこいい部分と、一番かつこいわるい部分の両方を見せてしまったけれど、結果としてそれがあの子の人生に方向性を与えることになつたのであれば、それでいいのかもしれない。ミユリはそう思うことにした。

「では、こちらがミユリさんとタチバナさんご夫妻、こちらが従姉妹のヨリカさん宛ての小切手になります。金額が大きいため、振出人はこの町のギルドではなく、都にある本部からなってますので気を付けて下さい……でも、ミユリさんは、もう何度もこの手続きもされてますから大丈夫ですね？」

ギルドの受付嬢、ハナヤカはよどみない明るい声でそう言い、ミユリに向かって微笑む。彼女の笑顔は、ギルドに集まる荒くれ者の男達にとってそうであるように、ミユリにとっても癒しと安心感の象徴だ。

ミユリはこれからこの小切手を持って町の取引所へと向かい、そこで口座にこれらのお金を振り込む手続きをすることになる。データベースは魔法によつて管理されているため、翌日にはヨリカの口座にも金額が反映されるはずだ。

「そういえば、勲章の授与はどうされるんですか？　都での授与式には行かれるんですか？」

ハナヤカは興味深そうにミユリに向かって聞く。

実のところミユリは国王から勲章をもらうのも初めてではない。冒険者になって一年目の年

に、ミユリとタチバナはハイドラ山のレッドドラゴンを倒して、一度勲章をもらっている。ハナヤカがこのムーンヴィルの町の冒険者ギルドに來たのはちょうど一年前だから、彼女はその時のことを知らないのだ。

「そうね、都に行く用事があればいいんだけど、わざわざ勲章をもらうためだけに、あんな遠い所まで行くのもね……今回は授与式には参加せず、この町の町長さんから頂くかと思ってるわ」

国王から直々に勲章を授与されるなど、普通であれば一生に一度も無い機会である。それを「遠いから」と言っただけで断ってしまうミユリに、受付嬢ハナヤカは憧れと驚きの入り交じったため息をついた。

「ああ、そうか、ミユリさんは以前にも国王から勲章を授与されたことがあったんだね！先週の魔導士ゼプテナムの件といい、ミユリさんは毎月のように勲章ものの成果を挙げられていますね。立场上、冷静に手続きをしなければいけないはずの私でさえ、まるで物語を見ているみたいな気分になってきます。そんな英雄の活躍を間近で見れて、幸運だと思ってます！」

賞賛の言葉を惜しまないハナヤカ嬢に、ミユリは満面の笑顔で応えると、手を振ってギルドの事務所を後にした。

事務所を出た後、ミユリは酒場兼ラウンジとなっているギルドの建物の中、壁一面に掲示されたミッションの張り紙を見て回る。そこに自分たち夫婦に向けた依頼が無いかどうかチェックするため。どんなに大きな成果も、どんなに強大なモンスターとの戦いも、まずはこの一枚の張り紙から始まる。だからこそ一流の冒険者であるミユリは、常にチェックを欠かさない。

だが、そんなミユリの姿は、昼間からギルドの酒場で飲んでいる、本日のミッションの無い冒険者たちの目を引いていた。

「おい、見ろよ。ミユリさん、今日は随分いつもと違った感じだな」

「いつもの革の黒い衣装と違って、随分普通な感じじゃないか」

「それに今日はタチバナさんと一緒じゃないみたいだ。珍しいな、一人でいるミユリさんを見かけるのは」

「これはひょっとすると、ミユリさんを口説くチャンスかもしれないぜ……？」

「馬鹿、あのミユリさんが俺達なんかになびくかよ」

荒くれ者の冒険者たちは、普段とは違う見慣れないミユリの姿に騒然とし、ひそひそと噂話をしながらも、その目はミユリの着ている草色のワンピースと、その上に柔らかく羽織ったベージュのカーデイガンに釘付けとなっていた。

暗い草色をした、どちらかと言えば地味な普段着とも言えるコットン製のノースリーブのワンピースであったが、生地が薄いため、ミユリの柔らかく、出るところはしっかりと出た身体のラインが、はつきりと現れる。

特にミユリのチャームポイントである大きく形のよいお尻が、普段履いているレザーパンツとはまた違った風合いで飛び出し、彼女が歩くたびに揺れるので、男達の目はそのやわらかな曲線に釘付けとなっているのだ。

「おお、ああいう普通の主婦みたいな格好のミユリさんもいいなあ……！」

常日頃からミユリに憧れている男達は、自然と表情を緩めながらミユリの様子を見守る。

その時、掃除をしていた酒場のバーテンダーの一人がカーテンを開き、窓を拭き始めた。薄暗いギルドの酒場の中に、開いたカーテンの間から光が差し込み、その光は、壁に貼られ

た張り紙を眺めているミユリの後ろ姿をも包み込んだ。

「おおお、み、見ろ……ミユリさんの姿……！」

ミユリを見つめていた冒険者の一人が声を上げる。その声に、ビールジョッキを傾けていた他の数人の冒険者もミユリの方を見ると、彼らは「おおお！」と驚きの声を漏らした。

「透けてる……透けてるぞ、あのワンピース！」

「身体の線が丸見えだ……！」

窓からの光に照らされたミユリのワンピースは、生地が薄いものだったせいか、暗い草色をしているにも関わらず、光を通してしまっていた。ワンピースの中にあるミユリの身体のラインが、埃っぽい酒場の中にきれいに浮かび上がる。

ベージュのカーディガンを羽織っているの、肩や胸の部分が見えないのは残念だが、きゅっと引き締まったウエストから、やわらかなお尻の曲線、そして太ももから膝に至るまでが、見事に透けてしまっていた。

男たちは騒然となり、飲んでいたビールを放り出して、このチャンスを逃すまいとミュリの方に身を乗り出し、じつくりと眺める。

「なんていい身体をしてるんだ……」

「奇跡だ……いや、これこそ魔法だ……」

「なんか、タチバナさんに悪いな……」

そう言いながらも冒険者たちはミュリの後ろ姿から目を離せない。

「それに……おい、気付いてるか……あの尻のところ……？」

「あ、ああ……もちろんだ。さつきから俺も『そこ』ばかり見ているんだ。だって、あれ……パンツが……パンツがもろ見えじゃないか……！」

明るい陽射しに照らされたからか、薄暗く埃っぽいギルドの酒場の中、ミュリの大きなお尻に貼り付いたワンピースの薄い生地は、その中にあるものを全く隠そうとせず、草色の布地の下、ピンク色をしたレースのパンティが、男達の目の前、はつきりとわかるほどに透けて見えてしまっていた。

「こ、こんな事があっていいのか……!？」

「ミ、ミユリさんの尻から目が離せねえ……な、なぜこんなにもパンツが透けて見えちゃうんだ……!？」

戸惑いと驚嘆の中、荒くれ者の冒険者たちは、見てはいけないものと知りつつも、ミユリの尻の透けたパンティを、穴が開きそうなほどに見つめ続けている。

「お前ら、これがどういうことかわかるか……なぜミユリさんのパンツが透けて見えちゃうてるのか……あのワンピース、尻の部分が擦り切れてやがるんだ!」

一人の冒険者が気付き、ミユリのお尻を指差しながら他の男達にそう言うと、皆も頷いて同意する。

「本当だ。確かに、あの尻の部分だけ、他に比べて生地が薄くなっている……」
「だから尻のところだけ、穴が開いたように透けて見えちゃまっているのか」

荒くれ者の冒険者たちは、その事に気付くと、かつてない科学の大発見をしたように、お互いに感心して頷き合っていたが、すぐに誰かが次なる当然の疑問を呈示した。

「しかし、何故、尻の部分だけが、そんなふうに……？」

一人の初心な男がそう問いかけ、皆が一瞬、静かになる。誰かが唾を飲み込む音が聞こえる。答えは誰もが想像してわかっているのだ。代表して、一番歳上の冒険者が口を開く。

「何故って、そりやお前、決まってるだろう。誰かがあの尻を、いつもいつも撫で回しているからさ。四六時中撫で回されて、擦り切れちまったに違いねえ」

「つまり、ミユリさんの旦那のタチバナさんが、そんなにいつもミユリさんの尻を撫で回しているってことか……？ あんなに生地が擦り切れちまうほど……？」

「当然の事だな。じゃあ逆に聞くが、もしお前がミユリさんの旦那だったとしたら、お前はあの尻を撫で回さずに、一日でも過ごせるか？」

歳上の冒険者は、訳知り顔でそう言い、後輩達に向かって問いかける。

「いや、む、無理だ。そんな事できつこねえ。あんな見事な尻が目の前にあつたら、触らずにはいられねえ。俺はきつと毎晩、あの尻を撫で回すだろう。もし俺がミユリさんの旦那だったらな……！」

若者の言葉に、その場にいる全員が激しく同意し、うん、うんと納得する。

「そりや生地も擦り切れちゃうわけだな……ミユリさんのあの尻じゃ、どんな男だつて……」

擦り切れた布地の下、透けて丸見えになったパンティのピンク色を眺めながら、冒険者たちは自分がその尻を撫で回すことを想像し、またミユリの夫のタチバナがその尻を撫で回していることを想像し、彼らの心は嫉妬と羨望、そして興奮に包まれた。

その時、ミユリが壁の下の方に貼られた張り紙を見ようと、身体を屈めた。

いい女にはありがちなことだが、ミユリは男の視線に無頓着なところがある。飲んでいる冒険者たちの視線が、自分の下半身に集まっていることも知らず、ミユリは上半身を折り曲げ、

その結果、窓から差し込む光の中、ミユリは男達に向けてお尻を突き出す格好になった。

「おおおお!?」

酒場のテーブルの周り、身を乗り出した男達が声を上げる。

ただでさえ、差し込んだ光によってワンピースの生地が透け、ピンクのレースのパンツが丸見えになっているのに、ミユリはそのお尻を、もつと見て下さいと言わんばかりに突き出したのだ。薄くなった生地に向こう側、男達の目には、お尻の谷間だけでなく、レースのパンツの股間の部分が、その縫い目の線に至るまではつきりと見えてしまった。

その股間の部分、肝心のところがわずかに柔らかく膨らみ、その真ん中がわずかにへこんで皺を作っている様子も、そして、その皺の中心にほんの1センチにも満たない小さな染みが出て来ていることも。

盗賊たちに『魔女のオマ○コ』と呼ばれているミユリの女の部分。

布地ごしに光に照らされたシルエットではあるが、彼らはその形をはつきりと目撃し、目に焼き付けてしまった。

うおおおお、と男達が盛り上がる声が聞こえてくるが、ミユリは「男の人はいつも楽しそうね」と思うだけで、まさか彼らが自分の股間に興奮しているとは思っても寄らない。

二十秒ほど後、ミユリは張り紙を壁の下まですべて見終え、めぼしい依頼が無いことがわかった。そのまますたと歩き、酒場の外へと出ていった。

「お、俺達は……凄いものを見ちゃった……」

酒場の中では、テーブルの周囲、完全に腰が抜けてしまった荒くれ者の男達が崩れ落ちていた。

冒険者ギルドを後にしたミユリは、取引所で送金の手続きを終えた後、三十分ほどかけて歩き、ムーンヴィルの町の外れにある一軒の立派な邸宅の前に立っていた。

時刻は午後三時。町の人々も仕事を休んでお茶を飲む時間だ。

ミユリはその邸宅の門に設置された小さな石盤に指を這わせ、門の鍵を開けるためのキーワードを入力する。

この鍵を解除してからでないと、魔法による警備システムが作動し、たとえ侵入したとしても攻撃を受けることになる。屋敷の各所に設置された彫像、その目や口にはめ込まれた魔法石から自動的に攻撃魔法が放たれ、侵入者を撃退する仕組みになっているのだ。

門をくぐり、周囲に数々のハーブや低木が植えられた石畳の道を歩き、ミユリはその立派な邸宅のドアの前に立つ。扉の上に取り付けられた悪魔の彫像、その目が輝き、ミユリの網膜を認識すると、玄関のドアが自動的に開いた。

ミユリは建物の中に入り、玄関ホールを抜け、午後の光が差し込む応接室を抜けると、その奥にある広いリビングも抜け、その隣にあるキッチンへと入る。水を汲み、火の魔法を使ってほんの数秒でお湯を湧かすと、ポットの中にあらかじめ用意していたハーブを放り込み、ハーブティーを淹れる。リコリス、シナモン、フェンネル等を使った、独自のブレンドによるものだ。

そのハーブティーを二客のティーカップに注ぎ、小さなプレートに乗せる。

門を解錠した時点で、この屋敷の主にはミユリが来たことは伝わっているはずだ。

だからミユリは「御免下さい」とも「お邪魔致します」とも言わない。

無言のままでハープティーを乗せたプレートを持ち、リビングのさらに奥にある書斎へと入っていく。

書斎の中では一人の老人が、魔術書を片手に揺り椅子に揺られている。

顎に生えた髭は短いが、その頭髮と同様にほどよくグレーの色が入り交じり、その人物がすでに人生の終盤に差し掛かっていることを物語る。

そして額と目尻に等しく刻まれた深い皺は、その人物が高い知性と洞察力の持ち主であることを示していた。

ミユリは書斎の机にプレートを置き、無言のままで老人にティーカップを差し出す。老人は何も言わずにそれを受け取る。

そして自分はそのこに用意されたもう一脚の椅子に腰を下ろすと、やはり無言のままでハープティーを口に運んだ。

長年の師弟関係であるこの二人の間には、言葉というものは必要がなかった。

老人の名はクジマ・ゾリユウジ。

ミユリの黒魔術の師匠である。

ミユリは王立学園に特別入学を許された十三歳の頃から、この老師に黒魔法の奥義を叩き込まれてきた。

「クジマ先生……先日ダンジョンの中で、先生の古いご友人とお会いしました」

十分ほどもして、クジマがハーブティーをあらかた飲み終えた頃になって、ようやくミユリが口を開いた。

「友人……？ 誰だ……？」

暖れた声でクジマが怪訝そうに答える。王立学園魔法学部教授だった頃から、クジマは偏屈者で通っていた。現在も孤独に隠居生活を送っており、彼の人生の中で、友人と呼べる人物はそう何人もいない。

「ゼブテナムという黒魔法の導師です」

ミユリの口から出た名に、クジマは思い出したようにゆつくりと頷く。

「ああ、あの男か。勇氣と野心の区別も付かぬ哀れな俗物であつた……で、どうした……？」

「私がこの手で、あの世に送つて差し上げました」

両手でティーカップを持ったまま、ミユリは答える。

「そうか。手間をかけたな……やはりあの時、儂が自ら相手をすべきであつたか……」

クジマが一瞬、遠くを見るような仕草をし、すぐにまた考え込むような表情へと戻る。

ミユリは、クジマとゼプテナムとの間に、どのような因縁があつたのかは聞こうとしない。ただ起きたことをそのまま伝えるだけだ。お互いに黒魔法という道の深みにまで精通している師弟の間では、余計な詮索も、同情も必要がない。

ミユリがハーブティーの最後の一滴を飲み終え、プレートの上に静かにティーカップを置い

た後、十数秒の間を置いて、クジマが言葉を継いだ。

「だがあのような魔導士を倒したのであれば、お前の名声もまた上がったことであろう」

ミユリがこのムーンヴィルの町で、冒険者として実績を上げ、英雄扱いされていることはクジマも知っている。それについてクジマは言葉にして褒めたことは無いものの、弟子の活躍を誇りに思っている事は、態度の端々から見て取れた。

「はい、おかげさまで。しかし……」

「しかし……？」

ミユリが言葉を継ぎ、クジマが片方の眉を上げて聞き返す。

「魔導士には勝利しましたが、ダンジョンの最浅層で出会った、奴の手下には勝てませんでした」

ミユリの言葉に、クジマは机の上に開かれた魔術書を、ぽん、という音とともに閉じ、わざわざ落胆を表現するかのように深いため息をついた。

「……また盗賊か？」

「はい」

ミユリは素直に答える。

「犯されたのか？」

ミユリは何も言わない。それが無言の肯定であることを、クジマは知っている。

彼女がまだ王立学園の学生だった頃から、師匠に対するミユリの返答は、肯定、否定、無言の肯定、この三種類しか無かったからだ。

「……ふん、ゼプテナムの奴に、お前の弱点を見抜かれなくて幸いであつたな。何年もかけて育てた可愛い愛弟子が、あのような男の性奴隷となつたのでは、儂も泣くに泣けぬ」

クジマはそう言つて、机の端に置いてあつた鹿の皮を取り、口の周りを丁寧に拭いてみせた。別段、汚れていたわけではないのだが、自分の感情の動きを弟子であるミユリに見せぬよう、照れから来る仕草だった。

ミユリは、そんな師匠の細かな感情の動きに気が付いたとしても、気にかけることはない。

「先生、今日お伺いしたのは、その時の敗北の原因を教えてください。だきたかつたからです」

ミユリはそう言うと、揺り椅子の上、半ば目を閉じているクジマに向かって、一週間前に行った冒険と、その中で起きた出来事について話し出した。

一週間ほど前。

ミユリとタチバナは、冒険者ギルドの事務所の中、受付嬢のハナヤカから、一件のミツシヨンを遂行してくれるよう頼まれていた。

「ダンジョンの中にいるのは、相当に強い力を持った悪の魔導士らしいんです！」

悪の魔導士。

今、このムーンヴィルの地には、国中から冒険者が集まり、モンスター討伐の最前線となっている。

しかし、今この場所で起きているのは、あくまで人間対モンスターの戦いだ。

まだ未開の地であるこの北の辺境で、お互いの居住権と生存権をかけて、人間とモンスターとの間で果てしない戦いが行われているのだ。

その中で、悪の魔術師、悪の戦士といった、『人間型モンスター』を相手にすることはそれほど多くない。

もちろん荒野や山間部には盗賊や山賊が跋扈しているが、彼らは自分たちの利益のために悪事を働いているのであって、モンスターの側に与しているわけではない。

そんな中で、もろにモンスターの側に付き、モンスターを従えた人間の敵が現れることは滅多に無いことだったのだ。

「すでに先週までに、二組のパーティーがダンジョンに乗り込んでいますが、どちらも魔導士のところへたどり着く前に、逃げ出して戻ってきてしまいました」

「ダンジョンの中のモンスターは、そんなに手強いのか？」

慌てた様子でミユリとタチバナに助けを求める受付嬢のハナヤカに、ミユリは質問を返した。

「そうなんです。この魔導士ゼプテナムが従えているのは、アンデッド・モンスターらしいんです。ゾンビやゴーストといった不死のモンスターが、迷宮の中をうようよしているらしく、腕の立つ戦士でも敵わないみたいなんです」

「不死のモンスターは、たとえ斬つてもまた立ち上がってくるからなあ……」

そりや高レベルの戦士でも苦勞するだろう、タチバナはそう言って肩をすくめる。

「それに、強大な力を持つ魔導士を相手にして、普通の戦士では戦えません。なので、やっぱ

りここはミユリさんたちにお問い合わせしようということになったんです……」

そう言つてハナヤカは、すぐるような目でミユリを見つめる。

「ふーん、魔導士ねえ……」

ミユリは即答はしなかった。

最強クラスの魔法使いであるミユリにとつては、たとえどんなに強大なモンスターが相手であらうと、恐れて逃げ出すなどということはあり得ない。

だがミユリには弱点がある。

たとえモンスターには勝てても、盗賊などのチンピラの集団に囲まれるとミユリは無力になり、はじめの姿を晒すことになる。はじめに敗北した姿を、文字通り下着の中まで晒すことになつてしまうのだ。

だからこそミユリとタチバナは、ミッションを選ぶことには人一倍慎重だった。

盗賊や山賊と遭遇しそうなミッションは避ける。

朝早く出発し、なるべく明るいうちに帰つてこれるミッションを選ぶ。

一日で片付かない場合は、安全な場所で宿泊が可能なミツションを選ぶ。等々、二人がミツションを選ぶにあたっては、人にはなかなか理解のできない、他の冒険者とは違った基準がある。

「魔導士ゼプテナムが従えてるのは、アンデッド・モンスターだけなの？ 戦士や盗賊といった『人間型モンスター』はいないのね？」

ミユリは一番不安に思っている点を、まずはハナヤカに聞いた。

「はい。先行した二組のパーティーからは、そういった報告は受けていません。どちらもゾンビとの果てしない戦いや、腐臭に耐え切れず、撤退したんです」

「腐臭……匂うのはちよつと、嫌ね。戦うのはともかく、不潔なのは嫌だわ……ダンジョンの中に、シャワールームとか、宿泊施設はあるのかしら？」

ミユリは会話の流れから、さらつとそう聞いたつもりだった。もし宿泊施設があれば、ミツションの遂行に時間がかかっても、朝まで安全に過ごすことが出来る。

「宿泊施設……ですか？ え……たぶん、ダンジョンの中にそういったものは……無いと思いますけど……」

困惑したハナヤカがそう返答し、ミユリは自分がおかしな質問をしてしまったことに気付いて、小さく舌打ちした。

「でもミユちゃん、考えてもみなよ。僕たちは、ミユちゃんが攻撃、僕が防御に特化し、夫婦で役割を分担して戦っている。でも、アンデッドが相手だったら、僕にも攻撃魔法が使えるよ……？」

タチバナは、ミユリに向かって指を振り、鋭い点を指摘してみた。

「そうか、アンデッド・モンスターに回復魔法をかければ、それは攻撃したのと同じ効果になるんだわ……！」

クラウド夫婦は、妻のミユリが黒魔法使い、夫のタチバナが白魔法使いであり、それぞれが

攻撃魔法、防御および回復魔法しか使えない。だが、お互いがそれぞれの分野のエキスパートであるため、夫婦が揃えば鉄壁となる。そのため、魔法使い二人組という異例のスタイルでありながら、これまでも数々の強敵を撃破してきたのだ。

けれども、戦う相手がアンデッド・モンスターであれば、タチバナの回復魔法を攻撃に転化できるため、攻撃力は二倍になることになる。

「だから、これはひよつとして、僕たち夫婦にとっては有利なミッションなんじゃないのかな？」

「本当だわ！ タッチちゃん、凄い。やりましょう、このミッション！」

ミユリは夫の見事な思いつきに感心して、タチバナの手を取り、ぴよんぴよんと飛び跳ねてはしゃいでいる。

夫の前だけで見せるミユリの無邪気な態度に、ハナヤカはほっこりしつつ、クラウチ夫妻がこの依頼を受けてくれそうなのでほっとした様子だ。

「でも、ダンジョンとなると攻略には時間がかかるね。モンスターの撃破しつつ、何度も迷い

ながら、マップを作成して進まなければならないからね……」

「やっぱり何日もかかってしまうのかしら……？」

タチバナの言葉に、ミユリが不安そうな態度になったのを見て、ハナヤカはここぞとばかりに言葉を差し挟んだ。

「それがですね、そのマップが既にあるんですよ！」

「え、どういうこと？」

驚いたタチバナがハナヤカに聞き返す。

「実はこのゼプテナムのダンジョンを設計したのは、高名な前衛建築家のランドン氏なんです。が、ゼプテナムに支払いを踏み倒されたらしく、恨みがあるようで進んで情報を提供してくれんです」

受付嬢ハナヤカがもたらした思わぬ情報に、クラウチ夫婦は驚きを隠せない。

「魔導士のダンジョンって、プロの建築家が設計してたんだ……?!」

「よく町から建築許可が降りたわね……」

「書類上は娯楽施設として申請されていたようですね……」

驚いているミユリとタチバナに、ハナヤカはさらに情報を伝える。

「そのランドン氏の話によれば、ゼプテナムは常に二匹のバンパイアを側近として連れており、普段はダンジョンの最奥にあるオフィスにて悪事に勤しんでいるそうです」

「バンパイアか……」

「少々厄介ね……」

クラウチ夫婦は考え込む。

バンパイアは強力なモンスターである。その戦闘力はトップクラスの戦士をも凌駕する上に、

攻撃魔法に対する抵抗力も高い。

「このゼプテナムのダンジョンが出来たのは二週間前。まだ具体的に、世界征服に向けた行動は何も起こしていませんが、近隣の村の住人から、騒音や悪臭といった苦情がすでに出ています。また、周囲をゾンビがうろつくことから、衛生上の問題も懸念されます。問題が大きくなる前に、ミユリさんたちに叩いてもらいたいと思っています……！」

受付嬢ハナヤカは、そう言って手元のファイルを閉じ、真剣な眼差しで冒険者夫婦の顔をじつと見つめる。

「わかったわ。やりましょう」

そのハナヤカの目をまっすぐに見つめ返して、ミユリは決意し、そう告げた。

（体験版ここまで）

© 八ヶ岳昌司 2020年

ブログ 寝取られと純愛（現在休止中）
ntflove.com

表紙絵 ジュエルセイバーFREE

<http://www.jewel-s.jp>